

氏名(本籍)	しま だ まさ はる 島田雅晴(埼玉県)
学位の種類	博士(言語学)
学位記番号	博乙第2016号
学位授与年月日	平成16年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	動詞的虚辞に関する諸現象：普遍文法の観点からの分析

主査	筑波大学教授	Ph. D.	中 右 實
副査	筑波大学教授	文学博士	藤 原 保 明
副査	筑波大学助教授	文学博士	廣 瀬 幸 生
副査	筑波大学助教授	Ph. D.	竹 沢 幸 一
副査	筑波大学助教授		加 賀 信 広

論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、生成統語論で仮定される虚辞要素の普遍文法的意味合いを究明し、英語の do 支持の do と日本語の「だ」が動詞的虚辞要素であるとする主張を多面的に実証することを目的とする。

本論文はまず「序論」ではじまり、研究対象と研究目的が論じられる。中核部分は大きく二部で構成される。第1部3章では do の虚辞用法が、また第2部3章では「だ」の虚辞用法が考察される。最後に「結論」で全体のまとめと今後の見通しが述べられる。以下、概要を示す。

序論では、著者の依拠する理論的枠組みと虚辞要素をめぐる先行研究が概観される。本論文は生成統語論の枠組みに依拠し、虚辞と呼ばれる統語的実体の普遍の意味合いを探究する企てに一翼を担おうとする試みである。初期の統語論から今日の極小理論 (Minimalist Program) に至るどの局面でも、虚辞要素に関する数多くの議論がある。英語で虚辞要素といえば、いわゆる非人称構文の主語位置に生ずる it や、存在構文の主語として生ずる there がよく知られている。これらの要素は語彙的な意味内容をもたないという意味で虚辞とみなされ、それらの生起は純粋に形式的な文法の要請によるものであると仮定されている。生成統語論では、これまで格理論 (Case Theory) や拡大投射原理 (Extended Projection Principle (EPP))、そして最近の用語では、素性 (feature) を用いる素性理論に基づいて、その生起を説明する道が開かれている。格理論、EPP そして素性は普遍文法を構成する理論装置として十分の資格を有し、それゆえ、虚辞の研究は普遍文法の研究に寄与するものとして重要視されてきたのである。

上述の it や there は文法範疇としては名詞に属する。これら名詞的虚辞とは対照的に、本論文では動詞的虚辞を主たる考察の対象とする。ひとつは英語の do 支持で挿入される do である (John did not come. /What did John buy ?)。そしてもうひとつは日本語の形容動詞や名詞述語を形成する「だ」である (太郎は優秀だ / 花子は学生だ)。do と「だ」の事実観察と理論的考察を通して次の論点が主張される。

- (1) 動詞的虚辞要素は特定の言語や構文に特化したものではない。
- (2) 動詞的虚辞要素は、名詞的虚辞要素と同じく、解釈不可能な素性の除去のために生起するという点で普遍文法の同じ仕組みによって生起するものである。

第1部は英語の do の虚辞用法をめぐる議論が展開される。do 支持は従来、現代英語に特有な現象であると考えられてきたが、ここではむしろ、古英語や中英語にもその現象があることが主張される。さらには印欧語の do 相当語に関する観察からも虚辞用法の存在が確認される。

まず、現代英語で do が生じる代表的な環境に、次に示すように、疑問文、否定文、強調文、動詞句削除文があり、do so などの動詞句代用表現との違いが指摘される。

- (3) a. What did John buy ?
b. John did not sleep too well.
c. John did come.
d. John left and Nancy did, too.

そして一方、古英語では、疑問文や否定文に do が生じないことから、do 支持はないと考えられてきた。それに対し本論文では、動詞句削除構文に do が生じる実例があるとの観察に基づき、古英語にも do 支持が存在すると主張する。従来、この種の do は行為動詞の代用形として機能する本動詞とみなされ、do 支持によって挿入される助動詞の do とはみなされなかった。しかし、著者の指摘する実例において削除されているのは非行為の動詞句なので、そこに現に生じている do は本動詞の do ではなく助動詞の do であると結論づけられる。

そうであれば、古英語で疑問文や否定文に do が生起しないのはなぜか、という問題が改めて問われることになる。Miller (1997) は、動詞句削除構文を証拠に、古フランス語にも、do 支持に相当する操作の存在を指摘しているが、これを踏まえれば古フランス語についても古英語と同じ問題が起こる。Miller はこの問題の存在に気づいてはいたが、説得力のある解決策を提示するには至っていない。

この問題に対し著者は、極小理論の素性を用いた解決策を提示する。何よりもまず、疑問文や否定文には真理値にかかわる Σ 素性と呼ばれる素性が含まれていると仮定する。この特定の素性は PF (Phonetic Form) というインターフェイスレベルでは解釈不可能である。それゆえ、「完全解釈の原則」(Principle of Full Interpretation) を遵守するためには、派生のある段階でそれを除去しなければならない。そこで、there や it の名詞的虚辞要素がそうであるように、do もまた、解釈不可能な要素を除去するために機能する動詞的な虚辞要素であると仮定される。そうすれば、虚辞用法全体を通して首尾一貫した自然な解決の道筋がたつ。かくして、古英語で解釈不可能な Σ 素性を除去するという問題はいまや、疑問文と否定文では do 以外のものによってそれがなされるのに対し、動詞句削除構文では do でしかそれができない、という経験的に妥当な区別に基づく説明が与えられる。

そして古フランス語でも完全に並行した説明があてはまるのである。

第2部では、日本語の述語形成にかかわる「だ」について多面的な考察が加えられる。日英語は、もちろん、系統的には何のつながりもない言語であるが、普遍統語論の視野で見れば、「だ」は do と同じ虚辞としての機能を担う要素であることが論証される。この種の「だ」の典型的な例は次のような文で示される。

- (4) 太郎が本を買った。花子もだ。

ここで「花子もだ」は動詞句削除構文であると仮定される。その理由は、これが do の生じる動詞句削除構文と同じ性質を有するからである、と著者はいう。たとえば、each other の解釈に関して、次に見るように、英語の動詞句削除構文とそれに対応する日本語の省略構文は、どちらも、each other を補う解釈が可能である。

- (5) a. Every Japanese couple consoled each other. Every American couple did, too.
b. すべての日本人夫婦はお互いを慰めた。すべてのアメリカ人夫婦もだ。

一方、同じように省略が関与しているのに「だ」が生起しない次のような構文では、Hoji (1998) が指摘するように、英語の場合と同種の each other の読みは出てこない。

(6) すべての日本人夫婦はお互いを慰めた。すべてのアメリカ人夫婦も慰めた。

このことから、(4)の「だ」の構文は英語の動詞句削除構文に相当するものであり、そこに生じる「だ」はとくに意味的に項をとるとはいえず、doと同じ虚辞要素であると結論づけられる。

ほかにも、動詞句削除構文ではないが、虚辞の「だ」を含む構文がある。すなわち、形容動詞文と名詞述語文である。

(7) a. 花子は静かだ。

b. 太郎は長身だ。

「静かだ」は形容動詞であり、「長身だ」は名詞述語である。とりわけ、名詞述語が連体修飾として機能するときには、「長身の太郎」のように、「だ」から「の」への交替が起こるが、この「の」も虚辞要素の一種であると主張される。

かくして、普遍文法の視野のもとで、印欧語のdoと同じく、日本語にも動詞的虚辞要素が存在することが確認される。(4)の「花子もだ」といった動詞句削除構文ではT素性が関与している。ほかに定形節を特徴づける機能範疇のT素性や、主語の生起にかかわるEPP素性もまた、「だ」の生起に関与する素性である。

審査の結果の要旨

本論文は、生成文法の極小理論の枠組みのもとで、現代英語の助動詞doと印欧語のdo相当語に加えて、日本語の助動詞「だ」もまた、動詞的虚辞要素であるとする主張を多面的に論証し、虚辞という理論的道具だての普遍的妥当性とその意味合いを追究したものである。

生成統語論では初期の理論から今日の極小理論に至るどの局面においても、いわゆる虚辞要素にかかわる議論が盛んに行われてきた。よく知られた虚辞要素に、英語における非人称構文のitと存在構文のthereがある。これらは名詞的虚辞に属するが、名詞的か動詞的かの違いを超えて、虚辞要素は一般に、語彙的意味内容をもたないために、純粹に形式的な文法の要請によって特別な文法的役割を担うものとみなされてきた。かくして虚辞の生起は、これまで格理論や拡大投射理論、ひいては素性理論に基づいて、説明する方途が模索されてきた。このような背景のもとに本論文は、①動詞的虚辞要素は特定の言語や構文に特化したものではなく、②名詞的虚辞要素と同じく、動詞的虚辞要素もまた、特定範疇内の解釈不可能な素性を除去するという普遍文法の中心的な仕組みにより生起するものであると主張し、多言語の資料に基づいてその妥当性を実証することに成功している。とりわけ、これまでにない日本語からの知見によって普遍文法の特性の解明に寄与するところは大きく、その独自性は高く評価される。

ただ、細部に論理的・概念的詰めが甘さが多少見受けられ、それが論証の不透明さや理解の妨げの原因となるところがある。とくに古英語では入手可能な資料に限られているという事情があるとはいえ、提示された資料だけからでは一義的な文法的解釈を導くことがむずかしく、著者の主張を支える証拠としては弱いところがある。さらにまた、著者は日本語の「花子もだ」を動詞句削除構文と分析するが、そうではなくむしろ、それを分裂文と分析するほうが記述的にも理論的にも穏当とする立論も十分に可能であり、この対案との比較考量が求められる。もちろん、これらの点は本論文の基本的な価値を少しも損なうものではないが、さらなる推敲によって学術論文としての完成度はいっそう高まるものと期待される。

よって、著者は博士(言語学)の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。